

研究通信

16.5.7

1967.5刊
村落社会研究会
事務局

豊橋市町畠町
愛知大学文学部
社会学研究室内

故・鈴木栄太郎・野尻重雄先生を悼んで

本会は、昨年九月と本年二月に、村落社会研究のうえで大きな貢献を残された鈴木・野尻両先生をあいついで失なうという悲報に接しました。今回、「研究通信」の紙上をかりて両先生の御業績をしのび、御冥福をお祈りするために、布施・柿崎両氏の御玉稿をうるることができましたので、両氏の御苦労に感謝しつつ、ここに掲載いたします。

故・鈴木栄太郎先生

布施 鉄治

昭和四十一年九月二十日、鈴木栄太郎先生は、東京都下北多摩郡狛江の自宅で急逝された。

狛江、覚東の先生の部屋からは、松の木々につゝまれた成城の丘が眺望された。その丘の裾には水田がひろがっていた。少なくとも、昭和三十四年、鈴木先生が北大を停年退職されて、東京に居を構えた当時は、そこは水田であった。そこには「野鳥」があつまつ

た。あるとき、鈴木先生は、そこに戯れ集う野鳥について、そのひとつひとつの生態をたんねんに私に語ってくれたことがあった。狛江の先生のお宅をとり廻むこうした光景はいまも変わらない。たゞ水田の多くが荒廃地となつたほかは――。

「最近の百姓は情農になつた。」

と先生は亡くなられる半年ほど前に嘆かれたことがあった。自らの生業がもはや生業としての価値をもたなくなつたとき、人は、かつては生業であったその労働に対する志向性を失う。

「米には、日本の百姓（先生はふつう農民のことを百姓と表現した）の血と汗の歴史がにじんでいる。この民族の労働と生活の結晶である稻作を、輸出産業にまで高める努力と方向を、日本の農政、また農民が本当に真剣に考へるか否か、農村を近代化するかどうかの分かれ道である。」という論旨を、そのとき、先生は熱っぽく語られた。

先生は明治二十七年、長崎県壹岐島で生まれた。まもなく一家は対島にうつられた。

先生は、日本の国、というより、そこで実際に労働し生活をしている民衆の中に、社会の眞の姿を求められた。

「明治の日清・日露戦争のとき、日本人が好戦的であったといふのは、あれは嘘ですよ。あれは、國家が権力をもって無理矢理、生活の中から人々を強奪していったのですよ。対島で、私は少年のとき、肉親が夫や息子をとられまいと、やがて出ていく舟の中で、すがりついて泣いていたのを知っています。あれは国家が権力をもって強奪していくのです。それからあとにおいても、この事実だけは変

「ありません。」

あるとき久し振りに、北海道から先生の家を訪れた私に、こうした日本の庶民の生活の歴史がもつ・現実・を力をこめて語ってくれたことがあった。先生は数年前から社会学者の目をもって、日本の社会的実態を捉えた「自伝」の筆をすゝめておられた。

先生の「自然村」の概念について話をかわしたものがあった。「日本農村社会学原理」（昭和十五年）を丹念に読んだものならば、それが注意深く、「日本の、しかも現時点」での農村社会の分析であることをことわってあるのに気付くに違いない。その意味で、それは丁度第一次大戦後の日本資本主義体制の全般的危機の中で、寄生地主制そのものが危機におちいり、中農、また耕作地主の創出によつて、その体制を補強、国家が「部落、秩序を、まさに権力をもつて再編した歴史的過程の中における日本農村社会の現実の調査にもとづく成果の、社会学的結実であるとうけれどとができるものであるが、そのとき先生が語られた論旨は整理すると次の如くなる。

ひとつは、先生御自身、農民運動を実践的に指導した友人を親友としてもつておられたが、当時、全体的にみると、農民運動の思想は外から入ったものであつて、その思想と行動とは、実際に部落で農業にたずさわる農民の生活と行動の原理の中にとけこんでいなかつたこと。

それではその行動の原理は何か。「私は特殊的な事例ではなく、平均的な、もつとも普通なものをみるために全国の調査にでた。村（行政村）にいつても、もつとも「普通の部落」をつねに紹介して

「もらつた。」

残念ながら、そのときの東北農村からはじめた調査の結果は、そらして、また岐阜でもつともインテンシィヴに行なつた部落調査の成果も、今日公表されていないが、そうした調査結果の体系化が、「日本農村社会学原理」として今日われわれの前にある。

「もちろん、日本の「むら」にはいろいろのタイプがある。しかし全体として、ひとつの類型として、当時の日本の農村・社会とはどういう構造をもつてゐるのか。と問われたら、あの「自然村」の概念で捉えられるものが日本の農村社会の現実であつた。」とそのとき先生は語られた。「それ以外には言ひあらわせない。」と強調された。

しかしながら、そのとき、岐阜で学生部長として数々の活動を行なつたそのことを、上司から注意され、関心を「農村社会学」へ移されたことも語つて下さった。そしてまた

「あなた方、戦後の人々は幸福です。私が岐阜で農村調査をはじめた頃には、何時も警察がついてきたのですよ。」ともらされた。

そのとき、私はさらに当時の農村における農民層の階級分化、また小作争議の頻度など、そういう現実について先生はどう考えられるのかをたずねた。先生は静かに微笑された。
「当時は、いっていいこと、言つてはならぬこと、これは大変なものでした。戦後社会学の研究に入ったあなたの方には分らぬことかも知れぬが……。」

戦後民主化された日本において、先生の使われた「村の精神」、「家の精神」というタームそれ自身に対する批判も出た。たしかに、その言葉には、戦時下の匂いがする。けれども、少なくとも戦後第一期の民主化路線にそった観念としてではなく、現実の問題として、現に存在する農民の意識、また彼らが現実に構成する社会の社会規範の問題として考えた場合、そして多少とも文化人類学的発想を考慮に入れた場合、この概念（この精神という表現は「Culture」Orientationといつてもよいであろう。）のしめすところの社会的実体の存在、かゝる觀念体系自身が戦前の寄生地主制体制を維持する機能を果したという点は認めねばならぬと思う。

そして段階論的にみるならば、所謂血縁の原理にもとづく同族的な家と家との結びつきそれ自身が生産・生活組織としての機能を果した段階から、「家」と「家」との地縁にもとづいた再編が国家権力を背景にそれなりに可能になつた裏には、農業生産技術の（しかも戦前の日本の場合、いうまでもなく小農技術としてそれは再編・発展せしめられたものだが）発展がある。もちろん、今日の段階においては、かゝる小農技術体系それが自身が崩壊をはじめ、そしてまた、国家独占資本主義体制下における資本主義的諸関係の、ストレートな形での農村社会への侵入の結果、農村社会がその物質的諸条件のレベルで客観的に変容をはじめたばかりか、具体的な農民の意識と行動において、社会的制度としての「むら」といわれる実体が大きく変容してきてること、こゝにことわるまでもない。

しかしながら、とりわけ戦前の、経済再生運動下における、つま

り鈴木先生がその体系化をなした時代においては、少なくとも「自然村」概念で抽象化されうるような社会的実体として、日本の「むら」が、その国家体制下に存在したという側面のあることは否定できぬところであろう。（もちろん、方法論的には所謂、伝統的な社会科学のそれであり、したがつてギャルビンらの「社会」把握技術の導入の上に立つて、人々の社会意識およびその表現たる社会制度から村落社会の構成原理を求めるという論理がそこにはみられる。戦前の寄生地主制下における日本農村の階級分化とその構造、そしてまた農民の社会をそなしたものとして存在させた彼らの物質的生産・生活の基盤、生産関係レベルでの分析視角はとられていない。つまり、そうした「農民」「農家」の全生活過程をとりまく、物質的生産・生活の基底的事実の拘束性から「制度」の存在形態そのものを捉えるという論理展開はそこではとられていない。その意味で、当時の社会制度としての村落それ自身が、その存在を「自然村」という概念においては十分表現しえぬ、という批判は正当性をもつてゐる。）

私は、鈴木先生の北大での最後の助手としてその教えをうけた。私がまだ学部学生であった頃から、先生は、ゼミの学生に対し、まず問題意識をもつこと。あれもこれもと百科全書的知識を求めることは愚で、本当に現実分析に役立つ方法、自分の方法を身につけるように努力すること。まったく不毛と考えられるような米国の社会学者の説まで、わが国ではその「結論だけ」を大切にもちこむ風

があるが、社会的現実・文化的風土がことなる日本に、『結論』だけをもちこむということは、それは科学することではないのであって、われわれが彼らに学ぶべきは、社会分析の方法であること。そうして、役に立たない方法はすること。社会はあなた方の生活の中、この日本にあること。われわれはまずこの足もとから社会の分析をはじめて、一般的法則をみちびき出すことができる。等々社会学を学ぶにあたっての心構えを述べられた。

しかし先生は自説にそつた調査だけを強制されるということはしなかった。個々人のもつ発想を大切にされ、また何よりも、現実の社会がもつ構造的規則性の発見にするどい関心をむけられた。

私も、先生の市街地調査、都市調査の数々に先輩と共に参加したが、私が先生と共に参加した農村調査では、札幌市郊外の旧白石村の農村調査がある。そのとき先生は、有線放送、に大きな関心をしめられた。そして有線はあきらかに、農村のコミュニケーションネットワーク、したがつてまた伝統的な社会学的タームにしたがうならば、その社会構造の変容をもたらすものであつた。

先生の北大での研究の集大成、『都市社会学原理』は昭和三十二年に公にされた。

私は、先生の『日本農村社会学原理』と『都市社会学原理』を比較するとき、そこには方法論的に随分と異なつた視角が生じていると思つてゐる。この点はもつと詳細な検討が当然必要だが、結論的にいふと、農民（「家」）と、むら、を捉えるアプローチが、いわば閉された共同体的社会における農民の側からの発想とするならば、

後者には、とにかく全体制的な発想がある（都市の機関説をみよ）。そうした体制に規制されたものとして都市集落の基本的構造と機能を抽出、しかるのちに、そうしたいわば行動の基本的枠組を規定された集落の中で、正常人の正常生活の構造論が展開する。

この「都市社会学」における現実分析の枠組のより一層の展開は、その論理的、内在的発展の必然として「国民社会学」の構想へとむかわれた。

私は「国民社会」という分析枠の中で、先生があらためて今日、はげしい形で資本主義的分解を、しかも日本の形態で強いたられるわが国、農村社会、を捉えなおしたとき、そこに、戦前の寄生地主制下の日本村落と異なるなどのような本質・存在を抽象されたか、かゝる点についてお教えを受けたかったと考へてゐる。

けれども、こうした事柄は、あきらかにあとにつく世代がその課題として解明すべき事柄であろう。

今回、東京教育大学の中野卓先生のお力添で、鈴木栄太郎著作集が未来社から刊行されることになった。私はこれを機会に、あらためて先生の学問的業績の論理的発展をあとづけ、その中から数多くのものを学ばせて戴きたいと思っている。（六七年五月二十日）

野尻重雄先生を悼む

柿崎京

今年に入つてから風邪気味で臥つておられると人づて聞いていたが、それほど大事にいたるとは思つてもいなかつた。二月一日、

先生がお亡くなりになつたという報せをうけても信じられなかつた。死因は心臓マヒということでしたが、漸く忙事から解放され、いよいよこれから、戦後の農村人口移動の研究をまとめられようとしていた矢先、あまりにも不意の計報であつた。

先生は、明治三〇年、京都府北桑田郡周山村（現京北町）の山村にお生まれになり、少年時代をここで過された。おだやかで、話し好きな、それでいて少し内気な先生のお人柄はこうした少年時代の生活環境の中ではぐくまれたのである。東京高等師範学校（生物学専攻）を御卒業後、一時、松山の師範学校で教鞭をとられたが、まもなく京都大学に御入学、橋本傳左衛門博士の下で農業経済学を学ばれた。米価に関する研究を卒業論文のテーマとなさつたとお聞きした記憶がある。当時は農村凶荒の渦中で、学界においても農村問題に議論が沸騰しつつあった。そうしたとき、橋本一大概の系譜に示される重厚且つ実証的な学風をもつ、いわゆる「京都学派」に学ばれたことは、先生の学問的関心や研究方法に強い影響があつたことゝ思われる。昭和五年、大学を卒業されると同時に、母校の東京高師の教官に迎えられ、農業経済学を担当されたが、その間に労作教育論など、農業農民教育に関する初期の業績を残された。当時、先生は生物学教室に所属しておられたから、農業経済学関係の文献資料類は殆んどなく、その点では恵まれた研究条件ではなかつた。その頃から農学教室を独立させることが先生の宿願となつたようである。その御努力は、昭和一八年、理科四部（生物農業専攻）の新設に結実するのであるが、さらに戦後の学制改革の際、この学科を

基礎にして農学部の創設に御尽力なされ、農村経済学科に、農業政策、経営学とならんで農村社会学、農村教育学というユニークな講座を開設するまでに発展させることになった。こうした事情を公表することは、控え目な先生の御本意にそむくことになるかもしれません。けれども農村社会学を講座として大学教育制度にとり入れたという画期的な事実は、村研会員の皆さんのお記憶に止めておいていただきたいと思います。

ところで、研究生活に入られた当時、先生が、ソローキン、ツイントーマン、ギャルビンらのアメリカ農村社会学の学説、研究方法に強い関心をもたれていたことは、大著「農民離村の実証的研究」の序文にも、その一端をうかがうことができる。既にこの頃から農村調査の指導をとり入れられ、毎年夏、学生と共に農村に入れられていたのである。時代はやがて軍国主義の抬頭による準戦時体制に入り、軍需産業の拡大強化にともない、労働力の給源として農村がとりあげられ、学会においても農村人口論、農家労働力質労働化論、また人的資源論などの論議が高まりつつあった。たまたま、例年の夏期調査実習を山梨県下の山村で行つた際、そこで村の青年がつづきと都市へ移動していく現状を目撲され、そのことが直接のきっかけとなつて、農民離村の研究と取組む決意をなされたということを伺つたことがある。かくて、農民離村の実証的研究は、昭和一二年より本格的に始められ、戦時中の困難な条件（—農村が戦力の重要な源泉に位置づけられるとともに、農村人口の把握は軍の機密事項として、その実態調査活動が制限されていく状況—）のなかで、

一五年までの四か年間に、神奈川県高部墨村（調査戸数六一四）にはじまり、岩手県波民村（同四九三）にいたる、七県下、二〇か村（行政村）、統計一〇五八一戸を数える膨大な農家面接聴取資料にもとづいて、周密な分析を精力的に進められた。その成果は、農村労働移動調査第一報「農村労働流出の階級性」（農業と経済第五巻三号）と題して発表され、以後、ひきつゝき第一一報まで一連の論文としてまとめられ、昭和一七年、前記の著書に集成されたのである。

随所に重要な理論的仮説を提示している本書の全貌をここで要約することは到底不可能であるが、第六編「移動に依る農家家族労働構成の変化と農業生産構造に及ぼす影響」は、私にとってもっとも興味深く示唆にとむ内容を多く含んでいるように思われる。この部分は、ソロモン・キンラアメリカ農村社会学の成果、チャヤノフの小農経済の理論を批判的に摂取し、日本の家族への修正適用をなされ、農民の移動現象を、①家族の大きさの決定要因として、②嫡系と傍系成員という家族員の地位・役割構造の差異に着目され、とくに「長子線」との関連において、③農家賃労化形態の進行、それにともなう農業生産構造、農家階層の分化に及ぼす影響といふ、社会学的な分析視角から考察されておられる。こうした先生の学問は、戰後、農村人口問題研究のシリーズ（第一集は一九五一年刊）、村研年報第四集（一九五七年）、「農村の人口」（野尻編著、一九五九年）などにおける、中島、並木、林（茂）論文をはじめ若手研究者に継承され、農村人口の研究を発展させる基礎となっているのである。

つて、その学問的意義は大きい。

『農民離村の実証的研究』は前述のように昭和一七年、岩波書店から発刊されたが、その学問的業績に対して、農学会賞、ひきつゝき農学博士の学位を授与されることになった。しかし、その後心身の極度の疲労から一時研究生活を中断しなければならず、加えて戦災、疎開、敗戦、またその前後に御両親がお亡くなりになるなど先生にとって御苦惱の多い日々が重った。しかし、学問への強烈な情熱は、こうした衝撃を克服させ、昭和二二、三年頃から、再び農村調査に着手され、戦後の農村過剰人口、潜在失業人口の研究に活躍なされ、多くの業績を示された。またその間、二五年には「農村人口問題研究会」の発足に中心的な役割を果され、二七年、「村落社会研究会」の発会時には年報委員（野尻・武田・福武）として参加されるなど学会活動に対する貢献も大きかった。

しかし、他方、戦後の学制改革、とりわけ農学部の創設や研究体制の整備などで、急に身辺御多忙となり、大学の評議員や農学部長に就任され、また定年と同時に京都学芸大学の学長に懇請され、二期学長をつとめるなど、年來の課題とされていた戦後の農村人口研究の完成は果されることができなかつた。四〇年三月、学長退任後、ようやく忙事から解放され再び御研究に専念できるようになられたときに、先生が急逝されたことは何んとしても悔恨にたえない。

みの虫も巢ですこしづゝ動き居り

今年の年賀状に書き添えてくださった先生の俳句である。底冷えのする京都の冬の日、病床に伏しつゝも、なお学問への執着にから

れ、じつとしておられないお気持だったにちがいない。謹んで御冥福を祈る。

村研、運営・編集合同委員会（第三回）

期　　日　昭和四二年五月一九日 午后六時より

場　　所　東京教育大学社会学研究室

出席委員

安原茂、柿崎京一

議　　事

一、年報第三集の編集について

予定されている原稿がほぼ出揃ったので、規定に従い、編集委員で内容について検討を加え、六月二日の次回編集委員会において、年報に掲載する原稿、掲載順序などを決定することに決めた。

原稿の集まりは例年よりも早くなったが、編集委員会でその内容について充分検討し、しかも大会前少くとも一ヶ月頃までに年報が会員に届くよう進行させるためには、原稿募集・執筆者決定・原稿〆切を更に本年よりも繰上げて行わなければならないことを確認し、秋の大会以後についての凡そその日程についても話し合がなされた。

一、本年度の大会運営について

(1) 日程、大会場所等について村研事務局から連絡あった別項の内容を確認した。

(2) 共同課題報告者について、今までに報告申込者はないが、その際会員から数名の推薦があつたので、この方々に対して委員会

から交渉することにした。

また、議長（共同課題報告の際の）には、本年の共同課題を提案なされた小池基之氏に依頼することに決定した。

(3) 自由報告の申込者は、現在までのところ一人だけです。委員会としては、少くとも三・四人を望んでいます。そこでつきの要領によって再度報告者を募集することに決定した。

申込期日　六月一五日まで（厳守のこと）

これまでに申込みされた方も含めて、申込の際には題目と多少の説明（アログラムの作成、発表順序などを考えるための資料にしたいためのもので、報告のねらいや調査地などを記入して下さい）を二、三程度書き添えて下さると結構です。

申込先　東京都文京区大塚二

東京教育大学　社会学研究室
村研東京連絡所

運営委員会より

一、村研運営に関する会員の方々より何にても御注文をお寄せ下さい。次回の運営委員会は六月二十一日を予定しています。

連絡先　東京都文京区大塚二

東京教育大学　社会学研究室
村研運営委連絡所

二、年報「村落社会研究」第一、二集はまだ多少残部があります。売り切れないうちに揃えおき下さい。

申込先 塙書房 東京都文京区東郷三丁目六の一〇

振替 東京 八七八二

お申込の際、会員である旨申し添え下されば編集者購入分として
つきの価格で入手できます。

第一集(一〇〇〇円)、第二集(二二〇〇円)(いずれも送料共です)

会員動向

(所属・住所変更)

村研運営委員の一人である布施鉄治氏は四月より法政大学社会学
担当助教授としての転任にともない、東京都杉並区天沼三一三八一
二一(電話二三九八)二〇八九へ転住されました。

会員、北海道教育大学函館分校社会学担当助教授 黒崎八洲次良
氏は学振の流動研究員制度によって、四月より一ヶ年間、東京教育
大学社会学研究室へ駐在されることになりました。

(右のような会員動向記事への投稿を募集します。御知
友からだけでなく御本人からでも結構です。合せて会
員名簿の整備に役立てたく存じますから。)

会員佐々木交賀氏は四月より日本福祉大学(名古屋市昭和区瀬川
町三一)社会福祉学部に転任されました。

会員小山陽一氏は四月より立命館大学産業社会学部に転任され、
住所は、京都府乙訓郡長岡町今里川原久保四二ノ三九となりました。

会員有木純善氏は四〇年四月より京都大学農学部に転任され、住
所は、大阪府高槻市日吉台一番町 合同宿舎九一四となりました。
(新入会員)

戸谷 修 愛知女子大学(社会学担当)住所・愛知県碧海郡知立町牛田 知立団地一八一五〇四

(会費納入) 戸谷 修 五〇〇円

昭和四一年度会計決算報告

掲載が大変遅れましたが、昨年度(事務局東京教育大農学部農村
社会学研究室担当)の会計決算(昭和四一年十一月末日〆切)を御
報告いたします。

収入の部		(円)
前年度より継越金		43,087
会 費		43,400
大会参加費他		97,590
計		184,077

支出の部		
印 刷 費		24,500
通 信 費		20,035
事 務 消耗品 費		3,990
備品費(テープ他)		1,490
編 集 費		5,760
大会宿泊・会場費		117,190
謝 金		5,000
計		177,965

次年度への継越金		6,112
----------	--	-------

名子制度」全部を「前編」として収録していると共に、新たに書きおろされた「後篇」として、その戦後版の調査結果を「後篇一

(昭和三年)」、「後篇二(昭和四一年)」として収録しています。

五二六頁(本文)に加えて、索引等二七頁を合せ、写真、古版図表等も大幅に増補されたものです。未来社、定価八〇〇円、編者(東京教育大、中野)扱いで三割引(送料共)、二二四〇円を現金封筒で申込まれれば送本させます。

二、及川宏『同族組織と村落生活』、喜多野清一編、並びに解説、例の荒沢村のモノグラフの全部、および村落社会学関係の論文数篇を所録しています。勿論「同族組織と婚姻及び葬送の儀礼」を含んでいます。未来社、定価五〇〇円、有賀のⅢ同様にお考え下さって送金あり次第送本致せます。

三、鈴木栄太郎著作集、日本農村社会学原理の全部を含む、の計画が、笹森秀雄・布施鉄治・藤木三千人などの村研会員諸氏の手で進められています。

(※右のような雑信記事への投稿を募集します。)

村研会員募集

村落社会の研究に関心をおもちの方があなたなりましたらどうか気軽に入会されるようお薦め下さい。入会希望の方は、愛知大学文学部の村研事務局かまたは、東京教育大学社会学研究室氣付村研東京連絡所へ申込み下さい。申あり次第、会員に登録されます。(入会資不用、会費年額五〇〇円)

事務局より

本年度大会の日程、場所を、運営委員会の御承認によって、左記のように決定いたしました。志摩とか鳳来寺とかの御要望もありましたが、渥美半島の突端伊良湖岬に最近できた国民休暇村(させていたときました。鳥羽まではフェリー・ボートで一またぎです。次号の通信位で、御出欠の葉書きを同封いたしますので、なるべくお早目に日程をお決め下さり(予約金の関係もありますので)、多数御出席下さいますよう、あらかじめお願ひいたしておきます。

第十五回村研大会について

本年度の村研大会の日程・場所はつきのように決定いたしました。詳細は追って御連絡いたします。

日 時 昭和四二年十月五日(木)～六日(金)

場 所 愛知県豊橋市 愛知大学および愛知県渥美

郡 伊良湖国民休暇村しおさい庄
共同課題 「村落構造の変化に対する推進力」

村落社会研究会会員名簿（1）

氏名	所属機関	住所
〔ア〕		
安孫子 鑑	小樽商科大学	小樽市砂留町一七ノ四
阿部とし子	北海道立保育専門学 院内	札幌市南十七条西十五丁目二一三一
阿部徳三郎	山形大学文理学部農 学部	山形県東田川郡三川村三本木
愛甲 勝矢	鹿児島大学法文学部	鹿児島市下荒田町四〇八
青井 和夫	東京大学文学部	千葉県柏市中原一七九三番一
東谷 敏雄	茨城大学文理学部 経済学科	水戸市千波町北葉山一七九九
青木 純善	北海道農業研究所	札幌市琴似町宮ノ森四四
有賀喜左衛門	京都大学農学部森林 経理学教室	大阪府高槻市日吉台一一番町
安藤慶一郎	日本女子大学	神奈川県逗子市久木三四〇
〔イ〕	愛知女子大学	愛知県春日井市春見町二七ノ二
井上 修次	北海道大学文学部	札幌市北六西五 北大文学部内
井森 陸平	甲南大学文学部社会 学部	神戸市灘区住吉町赤塚山一八七一
伊藤 章	農林省農業技術研究 所	東京都杉並区高円寺南 五ノ十八ノ十八
飯島源次郎	北海道農業学部農 業経済学教室	札幌市北二二条東十八丁目
飯塚 博久	農業高校	都馬県館林市足次九四
生田 清	鳥取県立米子東高校	島坂県米子市角盤町四ノ二八
池田 義祐	東京大学教養学部	東京都文京区駒込千田木町四三
泉 靖一		

氏名	所属機関	住所
〔ウ〕		
上田 一雄	大阪大学北校	奈良市生駒郡生駒町駒台北三五
牛島 盛光	熊本博物館	熊本市健軍町南古庭窪一八七八
内山 政照	所 職	東京都杉並区西高井戸二ノ八
江沢 繁	分校社会学研究室	札幌市南二三条西一二丁目
江馬 成也	東北大學教育学部	仙台市米ヶ袋下丁二四
榎本 遠西	山形大学文理学部日 本史研究室	山形市小白川町坂井アパート
〔エ〕	武士 宗次	東京都葛飾区青戸一丁目
奥田 力	東京大学経済学部	東京都葛飾区金町五四四七
大坪 大津昭一郎	東洋大学	横浜市港北区師岡三三九
大西 新潟大学	東京教育大学大学院	東京都新宿区百人町三一三八五
及川 徹郎	横浜市港北区南納島町五六五	
及川 伸	新潟市上所島大学官舎	
岡田 和彦	横浜市五香六寒字兵庫 松戸市五香六寒字兵庫	
和彦 謙	全国農業協同組合中 央会広報局	
和彦 謙	関西学院大学法学部	
和彦 謙	東京教育大学文学部	

岩崎 重夫	長野野高校	宇部市東櫛返
岩本 由輝	東北大學経済学部	相馬市大坪字前迫一三一ノ二
岩崎 重夫	山口県立宇部中央高	宇部中央高校
岩崎 重夫	長野県須坂市新町	
岩崎 重夫		

氏名	所属機関	住所
〔オ〕		
大西 正美	東洋大学	横浜市港北区南納島町五六五
大淵 英雄	慶應義塾大学文学部	新潟市上所島大学官舎
及川 徹郎	横浜市五香六寒字兵庫 松戸市五香六寒字兵庫	
及川 伸	全国農業協同組合中 央会広報局	
岡田 和彦	関西学院大学法学部	
岡田 和彦	東京教育大学文学部	
岡田 和彦		

〔オ項終り〕